

東 芋:てれこスープ

何百枚、何千枚に及ぶ独特の手描き線描をコンピュータに取り込み、北斎版画の色彩を援用することで生み出されるアニメーション。日本の日常生活の象徴的なイメージをモチーフに、穏やかに見える光景の表層下に潜む現代の日本社会が抱える複雑な問題点を、毒気を含みながらもユーモアをまじえ描き出してきた東芋。《にっぽんの台所》に代表される初期の「にっぽんの」と冠された作品で彼女は、現代日本社会つまり自身の外界の諸相に冷静な視線を送り不条理な世界を表現することで、自らをも含有する社会に投影された事象から自身を探求し「外と内」の関係を問うた。近年ではその視線のベクトルは逆転する傾向にあり、時には身体の細胞レベルに及ぶ内なるものへの注視は、外殻である皮膚の外側に位置する社会との関係性すら呈示している。また鑑賞者に身体的な体験を促す大型インスタレーション化も特徴の一つである。

今展では、日本のメディア芸術の特徴的表現方法であるアニメーションを、「ガラバゴス化」という日本国内で独自の進化を遂げ、世界標準から取り残される現象の中で精製し、グローバル化にも成功した作家東芋が、現代社会や人間の深層を突く映像インスタレーション作品によって「超ガラバゴス化」の可能性を見いだしている。

東芋は日本館を現代日本社会のメタファーとして構築する。それはバヴィリオンという空間の身体化が果たされる時でもある。吉阪隆正により設計された日本館は、天井と床の中央に穴があり、雨風が建物の中に入る構造として建設された。日本人のもつ自然観の本質を呈示することで、日本を表現したと考えられている。中国の古典「荘子」の出

典による「井の中の蛙大海を知らず」ということわざがある。またこれに続く文章として、「されど空の高さを知る」という一文が日本で付加されたとも言われている。「井戸の中の蛙が住む世界は本当に狭いのか？」床に開く穴を井戸に見立てた東芋による問いかけは、館内を井戸に、ピロティー部分を井戸から見える空にどこか昭和の匂いすらするその独特なアニメーションの映像インスタレーションによって展開される。イメージの連続性は、現代日本という井が想像以上の広がりを持つことを認識させ、その外界である空が下方に向けて果てしない深さ／高さにもつながるといふ反重力的な展開により、内と外の関係性にゆらぎを生じさせ、鑑賞者を自由に解き放つ。内側に存在すると捉えていた世界が、いつのまにか外の世界に存在していることに気づき、やがては外界／他者との往還を果たす。

東芋により名付けられたタイトルは望遠鏡の筒のように入れ子式という形容詞的な意味を持つtelescope(テレスコープ)の言葉遊びとも言える。「てれこ」とは、日本語で物事が逆転すること、あべこべのという意味で、「スープ」には生命体が発生する液体のイメージが強調されている。これまでも東芋の作品において水は重要な役割を果たしてきた。東芋により多義的かつ流動的な世界が呈示されることで、クラインの壺のようにあらゆるものに存在する境界や表裏の認識はあいまいなものとなり、我々の価値観は揺さぶられる。

コミッションナー：植松 由佳

